

「図工・美術教師の資質」というキーワードで、このサイトへのアクセスされる人がいる。しかしながら、私自身、美術教師として教鞭をとっていたのはわずか7年間でしかない。このような人間が美術教師の資質について語ることは、いささか恥ずかしいのであるが、教え子に二人美術教師をやっている人間を一応輩出してはいるので、図工・美術教師の資質についての私の個人的な見解を述べておきたい。

個を認められる人間か

美術は、個の作業である。

共同作業で行うこともあるが、基本的には、自己に内在するものを表現する作業であるから、個の作業と言える。

内在する自己の中に正解があるので、本来、本人以外は、その正解を知ることはできない。正解は人の数ほどあるのだ。

大事なものは、その子の正解がどのようなものであり、どこに向かって作業を行おうとしているのかを知る努力をすべきである。

教師の正解や表現を押し付けるべきではない。

個性というのは、すなわち多様性のことである。

多様性とは差異のことである。

多様性(=差異)を認められる人間かどうかが大変なのである。

人間は、多様性に分化する動物である。

これが個性であり、国家・民族・ムラ・企業・団体・組織においては、それぞれの文化というものになる。

多様性や差異やあるのが人間の間人たる特徴であり、逆に画一・均一化していけば、それは動物のように習性というものになっていく。

体育教師は、画一・均一というものを好む。

皆同じであるところに美しさを見出すようだ。

そして、他と違うものに対しては、矯正・画一化を行おうとする。

だから、体育教師が生徒指導を担当している場合が多い。

学園もののテレビドラマでも、たいていそうになっており、その対極にいるのが美術教師という設定である場合が多い。

なぜなら、美術教師は、前述のようにその仕事から、画一・均一を嫌い、多様性を好むからだ。

人と違うこと、皆いろいろであることが楽しいのだ。

某体育で有名な大学で、集団で動くのを発表しているのをテレビでやっていた。

これは、それを演出している教師のみの自己表現であり、演者である学生は芸術家でもなんでもない。(もしかしてこれ自体が芸術で無いのかもしれない)

それが証拠に、これを指導している教師は、学生に対して、「無になれ」「全体になれ」と激を飛ばしていた。

「全体になれ」とは、「個性を消せ」ということである、

個々の多様性や差異を認めないということである。

これは、芸術とは全く逆のベクトルである。だから、もはやこれは芸術ではないとさえ思える。

ちなみに、この教師は、かつてロサンゼルスオリンピックのとき、出場選手を集めて早朝から街中で入場行進の練習をさせており、これが他国のジャーナリストの目に留まり、「軍国主義的」「全体主義的」と非難された。

日本は、このロサンゼルスオリンピックを境に軍隊式の入場行進をやめている。

感性の広さ

感性、感性と良く言うが、感性の本来の意味を知っている人は少ない、「感性」は英語で「sence(センス)」と訳される。

「センス」は感覚であり、感覚を受けるものを「センサー」と言えば、ピンとくるだろう。

ちなみに、この言葉は、仏教用語では五根(耳・鼻・舌・身・見)に該当する。

感性という言葉は、本来は感覚器官の感度のことを言っているのであり、日本人が過大に意識している「心の感受性」とか「芸術的感受性」的なものは含まない言葉である。

そもそも、なぜ個の言葉が日本においてはこんなにも意識されているかと言えば、日本のカント学者が「悟性」とか「感性」を翻訳するときに、カントをリスペクトするあまり、過大に「センス」を意識したからである。

感性というものは、「良い」「悪い」という次元ではない。

本来、「感性が良い」とか「悪い感性」というものはない。

感性というのは、「広い」か「狭い」かである。

多様性を受け入れることができるか。

いかに多様な文化の良さを受け入れることができるか = つまり、感性が広い。

他の文化の良さが理解できない = つまり、感性が狭い。

ということになる。

では、感性を広げるには、どうすれば良いのか？

多様な作品、たくさんの作品を鑑賞すれば良いのである。

アジア雑貨の店や中南米の雑貨店も、様々なギャラリー、浮世絵、古今東西の広告媒体、看板、CD・レコードジャケット、ゲームのデザイン、などなど全て「鑑賞」という気持ちで見ると心をなやませるのである。

そうすれば、そのジャンルの良さや、そのジャンルの中での良し悪しがわかるようになるものだ。

デザインの教養

昔、私が美術教師であったときのこと、次のようなことがあった。

群の美術教師がそれぞれの生徒作品を持ち寄り、学校での取り組みを発表しあっていたときのことだった。

隣の学校のレコードジャケットの生徒作品で、当時発表されたばかりのレインボーの「闇からの一撃」のジャケットでデザインをそのままパクったものがあった。

しかし、当の美術教師は、(若いのだが)洋楽に興味が無いので、それがパクリであることを知らない。

しきりに「これだけは群を抜いて素晴らしいんですよ。」と言っていた。

私は、あまりにその教師が嬉しそうだったので、それが既成のデザインのパクリであることを告げられずにいた。

現在は、身のまわりに様々なジャンルの媒体があり、それぞれにデザインがある。

美術教師は、そのそれぞれについて幅広く知っておく必要がある。
邦楽・洋楽・ゲーム・アニメ・テレビ・映画・書籍・ファッション・キャラクターなどなど...
もちろん、古典的な美術・工芸・デザインについても教えられるだけの知識が必要である。

知識としての美術

図工・美術教育は、画家や芸術家を育てる教科ではない。
だから、もちろん図工・美術教師の資質としては、別に教師が絵や彫刻が得意である必要は無い。
そして、皆が全員、絵や彫刻が得意であるわけではない。
中には、絵は下手だが、プロデュースする才能はある子もいると思われる。
音楽業界がまさしくそうであるからだ。
発達の豊かな子、表現技巧の優れている子、プロデュースする才能のある子、そして、知識としての美術に興味を持ち、それを論じることのできる子もいるはずだ。
知育としての美術教育もありなのである。
私は教師時代、鑑賞教育をずいぶんやっていた。
技術では劣るが、それによって美術という教科を嫌いにならないで欲しかったからだ。
技能がだめでも美術に興味がある子を育てたかった。
昨年、そのときの教え子(もはやおばさん)に、「先生の美術はとても楽しかった。」と言われたときは、本当に嬉しかった。
私は当時、ルネサンス、絵の具の歴史、文様、浮世絵などを通して、人間の発想とか文化の交流のようなものを教えていた。

だけど、目標は示せ

答は、制作する生徒一人一人の心の中にあるけれど、だからと言って、バラバラのことをやらせていたら授業は成り立たない。
それぞれの制作においては、テーマと目標はきちんと教師側から示さなくてはならない。
例えば、「今回は、アメリカのカントリークラフトの文化とデザインを学び、ステンシル技法を用いて、印鑑箱を製作する。」というテーマの場合、
アメリカンクラフトについての歴史やデザインを理解したか？
ステンシル技法について理解したか？それを使いこなせたか？
計画を立てて制作をすすめることができたか？
というような目標点を生徒に示し、その明確な目標に向けて作業をすすめることが大事なのである。
そうすることで、ここには、単に「うまい・へた」という次元以外の評価すべき観点が生まれるのである。
むやみやたらと勝手に制作をさせて、その出来映えを教師の主観で評価してはいけないのだ。
同じように、手の巧緻性以外の、鑑賞的スキルとかプロデュース的スキルとか、計画性とか、利便性とかの目標を明確に示し、そのためのプロセスを示してあげることが重要なのである。
教師の作業は、このように、「目標とプロセスを示すこと。」「作業中の生徒の世界観を探ること。」「評価すること。」の3つになる。

催眠はダメ

「お前は だ。」と言われると、人は少しは「自分はそうなのかな。」と信じてしまう。誕生日占いとか血液型占いとか、どんな占いでも当たっているように思えるのはそのせいだ。

他の項目を見てみると、そっちの方が自分にあっている場合があったりするものだ。

「お前は文系の人間だ。」「お前は理系の人間だ。」「お前は絵が下手だ。」と烙印を押され、ラベルを貼られた人間は、そのようになってしまう。

これは、一種の催眠術だ。

だから、教師は決して「君は絵が下手だ。」とか「君は手先が不器用だ。」などといった烙印を押してはならない。

これは、本当に恐ろしい呪縛となりうる。

「こんなこと勉強しても、社会に出ても何の役にも立たない。」

「勉強以外にもっと大切なものがある。」

「五教科さえしっかりできていればいいんだ。」

「読み書き計算さえできればいいんだ。」

「お前は頭が悪いんだから。」

いつのまにか、これらのことが価値観として頭の中に入り、そこから抜け出せなくなるのだ。

このように言われた経験のある人、けっこういるのではなからうか。

叱ると褒める

教師になるとき、初任者研修などで、よく「ほめて育てろ」と言われる。

特に美術は、「褒める。」「作品をけなすな。」と言われる。

けなしていけない理由は、上記の通りである。

ところが、実際に美術教師となって授業をすると、褒めることに力が入り叱れなくなってしまう。

このような経験のある方も多いのではないかと思う。

そして、生徒の口から「何をやっても褒める先生」「叱らない先生」と言われはじめ、あげくのはてには(最悪の場合は)、授業が成立しなくなっていく。

なぜ、このようなことになるのか。

ここには、教える側の大きな勘違いがあるからだ。

多くの日本人が勘違いし、テレビでの教育討論でも間違っているまま論議が進められていることだが、

「褒める」の反対語が「叱る」であると多くの人が勘違いしているが、

「褒める」の反対は「けなす」であり、

「叱る」の反対は「甘やかす」である。

日本では、「褒めて育てる」、その反対が「きびしく叱って育てる」という2元論で語られる。

そして、「どっちが良いか。」などという議論になる。

これは間違いである。

授業をまじめに受けない。授業態度が悪い。宿題という義務・約束事を守らない。ということについては、当然叱って当然だ。

しかし、作品の出来映えという先天的なことや得意・不得意に関することで叱ってはいけない。

つまり、「やらないこと」は叱ってよいが、「できないこと」は叱ってはいけない。

もちろん、頑張ったこと、よくできたことについては、褒めてあげなくてはいけない。

教育は「叱ったり、褒めたり」しながら行うものであり、決して「甘やかしたり、なじったり」して行うものではないのだ。

考えてみれば、当然のことではないか。